

政期には、当然のことながら『医心方』はわが国医療に根付いていたことがわかる。

(京都医学史研究所)

44 『口齒類要』質疑

杉本茂春

一

一九九一年、日本医史学会関西支部学会、内藤記念くすり博物館で、青木允夫前館長から、写本『口齒類要』のコピーを贈られた。

勉学の跡の著しい写本について先人の辛苦を思いつつ、再三精読。口科・齒科学とは何かを問い直すこととなった。

二

『口齒類要』

古呉 薛巳 著

後学 宋璞 校

三

古呉は、後漢(二五―三〇)滅亡後、三国時代(三三〇

一八二〇)に入り、一八二九年呉王、孫權(大帝、一八二二—
五二)帝と称し、建業(南京)に都す。以後、三国(呉・蜀
・魏)鼎立の形となる。呉より隋の統一まで、六王朝が建
業に都したので、六朝時代とよぶと史書にみえる。古呉と
は、呉(二二九—二八〇)の興隆期であろう。因に、耶馬台
国の女王卑弥呼、魏に使者を派遣したのは二二八年のこ
と。また、後漢の許慎撰する『説文解字』の成立は一〇〇
年ごろのこと。

四

宋璞の校訂がどこまで薛巳の原著に忠実であったかは別
として、原著は説文の字義をふまえていたと考えられるか
ら、『口歯類要』の題名は、今日、われわれの理解してい
る、

口、齒、類、要、

では決してなかった。

五

説文に、

口 人所以言食也象形、凡口之属皆从口

段 玉裁注には、

口 言語飲食者口之兩大端舌下亦曰口所以言別味也頤
象伝曰君子以慎言語節飲食象形 苦厚切

口は、胸中にたたむ思想を言葉として吐きだす出口であ
り、營養を摂取する、食物を味わい、咬み、胃の中に送る
入口である。口は人類にとって最も大切な竅(孔)、人体に
ある、通りぬけになっている孔のことで、君子は言語を慎
しみ、飲食にも節度を忘れない。そこまで深くよみこんだ
うえで、文字自体は象形と断定している。

口は、生命の科学からすれば、生命の営みを表す言葉の
出口であり、生命を維持する食物のとり入れ口で、口の健
康は生命の健全を意味していた。

〔説文〕齒 口斷骨也象口齒之形止声凡齒之属皆从齒

昌里切 𪗇 古文齒字

〔段注〕齒 鄭注周礼曰人生齒而体備男八月女七月而生

齒 𪗇 大徐本誤

説文は、齒そのものについて多くを語っていないけれど
も、齡を掲げているところから察して、段氏も周礼をひ
き、注を加えている。齒には人の一生を予測し、人の生命
を造りだし、人の生命を養う器官という大認識に立ってい

た。古文、周人の発想には、Dantia の理念がこもっていたにちがいない。

〔説文〕類 種々相似唯犬者甚从犬類声

類 難曉也

類は、意符犬と音符類とから成り、もと、たぬきの意を表したが、類、紛らわしい意に通じ、「たぐい」似るなどの意に用いる。犬に甚だよく似ていて、はっきりと区別しがたい。

〔説文〕要・叟 身中也象要自臼之形

要は、人が両手で腰のところを押えているさまに象り、腰、腰に帯をしめる意を表し、かなめ、しめくくる意。

口歯の諸症状を主として、人体にある七つの孔、七竅の故障を説く書籍を題して、『口歯類要』という。

六

症例、一婦人因怒牙痛寒熱用小柴胡加芎帰苓朮山梔而疼痛止用加味逍遙散而寒熱退

(或る一人の婦人怒りに因りて歯痛寒熱あり、小柴胡を用い、川芎・当帰・茯苓・白朮・山梔を加えて疼痛止み、加味逍遙散を用いて寒熱退く)。等々。

七

本書は、全身症状を伴う口腔疾患の治験例等を多く集めて、歯科医史学の秘密境と言える。

(大阪市)